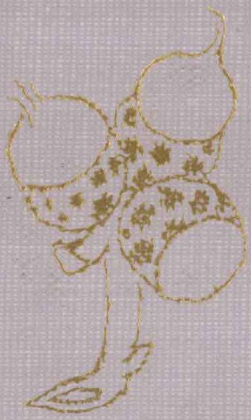

堀辰雄全集

第六卷

8ㅣ
ㄱ

堀辰雄全集

第六卷

筑摩書房

堀辰雄全集第六卷
昭和五十三年五月三十日初版第一刷發行

著者　堀辰雄
發行者　岡山猛
發行所　筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
郵便番號　一〇一—九一
電話　東京(291)七六五一(代表)
振替　東京　六—四一二三

印刷　株式會社精興社
製本　鈴木製本株式會社

Printed in Japan　0393—70106—4604

目次

プレオリジナル

I

風景　《山繭》大正十五年三月……七
土曜日　《山繭》大正十五年六月……一五
ルウベンスの僞畫　《山繭》昭和二年二月……二五
卽興　《驢馬》昭和三年二月……三五
眠り　《詩と詩論》昭和五年三月……四三
1924　《詩神》昭和五年六月……四九
聖家族　《改造》昭和五年十一月……五七
恢復期　《改造》昭和六年十二月……八五
燃ゆる頰　《文藝春秋》昭和七年一月……一〇九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

麥藁帽子　《日本國民》昭和七年九月　……一三三
美しい村……一四七
山からの手紙　《大阪朝日新聞》昭和八年六月二十五日　……一四八
美しい村 或は小遁走曲　《改造》昭和八年十月……一五三
夏　《文藝春秋》昭和八年十月……一八三
暗い道　《週刊朝日》昭和九年三月十八日　……二〇五
風立ちぬ……二一一
風立ちぬ　《改造》昭和十一年十二月……二一三
冬　《文藝春秋》昭和十二年一月……二四七
婚約　《新女苑》昭和十二年四月……二六五
死のかげの谷　《新潮》昭和十三年三月……二七七
幼年時代　《むらさき》昭和十三年九月—十四年四月　……二九三
幼年時代　『燃ゆる頬』昭和十四年五月　……三五三

向島　《時事新報》昭和六年三月二十四日—二十七日　……四一一
墓畔の家　《作品》昭和七年四月　……四一九

II

匈奴の森など　《新潮》昭和十年一月　……四二七
〈詩人も計算する〉　……四四三
詩的精神　《帝國大學新聞》昭和四年五月十三日　……四四四
超現實主義　《文學》昭和四年十二月　……四四六
すこし獨斷的に　《帝國大學新聞》昭和五年四月二十八日　……四四八
プルウスト雜記　……四五三
〈一〉　《新潮》昭和七年八月　……四五四
〈二〉　《椎の木》昭和七年八月　……四六四
〈三〉　《作品》昭和七年八月　……四六九

リルケ年譜……四七七
（初出誌）《四季》昭和十年六月……四七八
（初収本）『雛子日記』昭和十五年七月……四七八

Ⅲ

不器用な天使　原稿……四九七
刺青した蝶　原稿……五四一
爐邊　原稿……五五三
解題……五六一

堀辰雄全集第六卷

プレオリジナル

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I

風景

《山繭》第十號（大正十五年三月）掲載

僕は大概一週間に一度くらゐは憂鬱になる。しかしその憂鬱は僕の生活の垢ほどのものだつた。で、さういふ氣の重いとき、僕は好んで野蠻的な風景の中へは入つていつた。そこで僕は出來るだけ長い間、歩き廻つてゐるのである。さうして荒削りな草木やいきいきした空氣にこすられ、その垢のごときものをさつぱり洗ひ落してしまひたかつた。が、僕は不幸なことに自然の原始性に慣れぬ都會人である。いかに氣に入つた風景でも、それをうす氣味わるく思ひ出すと、そこに一時も居たゝまれなくなるのであつた。しかしながらその不幸は、僕に、氣に入つた風景をつかまへ次第、ごく上等の煙草を吹かすことを思ひ付かせた。さうすると僕は、いい應接室を思はせるやうな煙草の匂で、どんな風景もいくらか居心地よくさせることが出來たのである。

僕は、この夏の末ある港町へ旅行にいつたときも、だから、煙草入にロードバイロンを詰めておくことだけは忘れないでゐた。

その煙草のことを絶えず思ひ出してゐるやうなのも心細いに違ひないが、さうかと言つて、まるきり思ひ出さないでゐるのもいけなかつた、ちよつと落せさうもないくらゐの垢が知らず知らず溜つてしまふから。……ところで、その旅行の時は後者たるをまぬがれ得なかつた。毎日、あまりに輕快すぎる生活が續いてゐた。そのため、何處かで秋が夏と戰ひだしたやうな或る日の午後、突然僕を襲ひ出した憂鬱を、これまでに經驗したことのないやうな重苦しさで感じずにはゐられなかつたのだ。その憂鬱は、それを僕がかすかに豫感しながらおれは憂鬱なときどんな顏をするだらう——あの鯉のやうな顏になるのかしらといくぶん誇張して考へたのを、ふと、これより巧妙なのがあらうと思はれ

そういふ
そうして
そうすると
そうかと
落せそうも

ぬくらゐに適切な比喩だと思つたとき、いままで漠としてゐ〈た〉のが急にその鮮明さを增してきたのである。

それに氣がつくと、僕はロードバイロンを三本ばかり袂に入れるなり、まるで自分の憂鬱を先廻りするやうな勢ひで家を飛び出していつた。

僕は歩き出しながら早速、此町で氣に入つてゐる風景を、數枚は、記憶の中で數へ上げることが出來た。それは大抵、この頃ヴラマンクに感心してゐる僕が殆んど無意識裡に彼の好みで選んでしまつたやうな風景だつた。その中から更に一枚を無雜作に選んでおいて、僕はその方へ一直線に歩いて行つた。數分後、僕はその黑ずんだ風景——思ひ切つて高く伸びた栗並木の中にゐた。しかしその風景から自分だけが妙にはみ出してゐるやうな不自然さを感じながら。これはどうしたといふ理由なんだらう。が、そんな事を考へてゐるどころではなかつた。その不自然さがいますぐにも僕を鯉のやうにさせてしまひさうに思はれるので、僕はいそいでその風景を立去つてしまつた。——けれど、そのひどい憂鬱に襲はれかゝつてゐる僕を快よく迎へてくれないのは、そこばかりではなかつた。これならと思つて數へておいたすべての風景に、まるきり僕を相手にしないやうな冷淡な表情を一つづゝ順次に發見して行つたのである。或風景なぞは、それを組立ててゐる七八本の樹木が皆、まるで僕を輕蔑してよそつぽ向いてゐるやうにさへ思はれた。

それで僕はますます自分が鯉に似てゆきさうに感じながら、其等のヴラマンク好みの風景から投げ込まれるやうにして波止場へ出た。波止場の附近は相變らずぷんぷん酒臭い船員や忙しく陸揚してゐる人夫どもで一ぱいだつた。さういふ中を僕は窮屈に歩くといふよりも、その中の人氣の無い所を所をと拾ひながら歩いてゐた。と突然僕は自分が變な一區域に迷ひ込んでしまつたやうに思つた。

しかし僕が變だなと思つたのは、次の瞬間、人が始めて風景に接したやうな驚きに變つてしまつた。

大低、

しまひそうに

ゆきそうに

I・49

そういふ

窮屈に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com